

2 序文

キリシタン研究をするなら翻訳の面からの研究をと勧められたこと、また、神父さんたちの研究は史学関係が多くその面からの研究も小島さんの仕事の特色になっているといえようか。

小島さんの関心は、単なる翻訳法にではなく、宗教書という付加価値が翻訳の技法において、どのように実現しているかということにあるようである。その一つの条件として、キリシタンではない日本の知識教養人を信徒に獲得するために彼らを納得させるべき訳語の撰び方、言葉遣いに目が向けられ、国字本も単に平易な表現にあるとせず、的確であると同時に、重み、手応えを感じさせる用語である必要があるとする。

このたびの研究は、この方法で「コンテムツスムンヂ」のローマ字本、国字本の訳者が誰であるかを確定しようとしたり、また、遣欧使節がローマ教皇に謁見してインヅルゼンシアを受けるためには「コンテムツスムンヂ」の清書した稿本が出来ている必要があることから、その実現を証すると推定される書込みがボドレイアン図書館本に見えることをもとに、1582年2月までには完訳されていたと断ずるなど、意欲的な労作といえよう。

ともあれ、本書は、単に『コンテムツスムンヂ』だけを対象とした研究にとどまらず、広くキリシタン版宗教書を研究するばあいに、かならず参看されるべき、本格的かつ重厚な研究書といえることができる。

2009年5月20日

目次

序文	大塚光信	1
第1章 「コンテムツスムンヂ」の背景		11
はじめに		11
1 キリシタン版「コンテムツスムンヂ」刊行の経緯		12
2 『コンテムツスムンヂ』の伝本		14
3 『コンテムツスムンヂ』の内容		19
4 ヨーロッパにおける思想的背景と「新しい信心」運動		21
5 原著者について		24
6 研究小史		30
第2章 キリシタン版とラテン語原典		38
第1節 原典へのアプローチ		38
1 引用章句をめぐる翻訳の種々相		38
(1) ローマ字本と国字本の修訂の様相		39
(2) 修訂箇所よりみる訳出の発展		45
(3) 国字本の推敲態度		49
(4) ラテン語文の異なるもの		52
(5) 引用章句よりみた原典への提言		56
参考資料		58
2 ローマ字本・国字本の一致する訳		66
使用テキスト		68
3 ルイス・デ・グラナダ訳スペイン語本について		70

第2節 キリシタン版の目次について	74
1 目次の異同	74
2 国字本の削除と大幅異同(資料)	78
タイトル対校(1)	79
両キリシタン版 (付) 現代語訳	
タイトル対校(2)	94
目次比較—ラテン語本 1923 年刊 Ratisbonae (ドイツ) 流布本	
スペイン語訳本 1555 年刊 Alcala de Henares (スペイン)	
1577 年刊 Seuilla (スペイン)	
3 国字本の省略と内容	118
(付) アンブロジーナ本遊び紙の書込みについて	122
第3章 ローマ字本と国字本の文体	126
第1節 国字本の修正	126
1 仮名遣い(表記・音韻)に関して	126
2 語法・活用に関して	130
3 接続に関して	132
4 用語に関して—「上表」「自用」「挙用」「執着」	134
第2節 文体と訳語の修正	140
1 漢語から和語へ	140
2 和語を和語で	146
3 和語を漢語に	147
4 漢語を漢語に	150
5 本語から訳語へ	152
6 訳語から本語へ	152
7 四字熟語の言い換え	152

おわりに—漢字音について	152
第3節 ローマ字本の用語・国字本の用語	154
1 ローマ字本の特徴的な用語	154
1 あるかかりに 2 心と 3 誰やのものか 4 向うざす 5 させら	
ざる 6 と云つば 7 櫃をささせ 8 なんぼう 9 はらりと	
10 いきやかなる 11 気むさき事 12 払ひのぞくる 13 低し	
14 見かどむる 15 けしからぬ 16 軽賤なる 17 すく 18 節目	
19 「事」の多用	
2 国字本の特徴的な用語	170
1 誰が 2 かなびく 3 こなす 4 はごくむ 5 ゆゆしさ	
3 「コンテムツスムンヂ」の用語	175
1 落としつけ 2 ご前駆 3 とがをつく 4 人間気 はるくる	
6 もしは・もしくは 7 もどかる	
第4章 ラテン語原典より見た翻訳語の実態	184
第1節 単語の訳出	184
1 仏教語の援用	184
(1) 空間の訳出—terra と mundus	184
(2) 「時」の訳出—訳語「過現未」	191
(3) 「コンテムツスムンヂ」の仏教語	194
(4) 「不退の寿命」	199
(5) 仏教語の問題点	200
2 本語を用いた訳出	203
(1) 説明訳	205
(2) 固有名詞および事物を表わす単語について	205
(3) キリスト教用語の扱い	207
(4) 新語の発明	213

(5) おわりに(問題点—文章論の立場から)	213
3 類語の翻訳	214
(1)インヘルノとゲヘンナ (2)エウカリスチャとコムニアン	
(3)サントとベアトと善人 (4)アニマとスピリツ	
(付) オラシヨ	
第2節 文法の訳出	228
1 受身形の訳出	229
2 接続法の訳出	233
3 不定詞の訳し方	241
4 命令法の訳出	246
5 引用文の扱い(語法)	254
6 最上級形の訳出	265
7 比較級形の訳出	276
8 時制の訳し方	291
第3節 『コンテムツスムンヂ』の否定表現とその訳出法	299
1 ラテン語の側からみた否定表現	300
① 副詞 non (～ない)、ne (決して～でない)、nec (又～	
ない、～も～でない) の訳出	301
② 形容詞「無し」による訳出	302
③ 自立語による訳出	304
④ 漢語接頭辞による訳出	306
⑤ 二重否定表現	307
⑥ 反語的訳出	308
2 否定語の訳出例	308
否定の強調表現	309

3 訳文例からみた否定表現の様相	333
第5章 コンテムツスムンヂの翻訳態度	337
第1節 接続語の語形	337
第2節 文末表現について	350
1 ローマ字本の文末表現	351
2 国字本の修正よりみる文末表現	356
(1) 命令表現の修正	357
(2) 平叙文	361
(3) その他、否定表現に関して	367
(4) 疑問文	368
(5) 感嘆文	369
第3節 四字熟語の世界	370
第6章 文化の訳出	401
第1節 直訳体の効果—斬新な表現	401
1 文 体	401
(1) 呼びかけ文	401
(2) 感嘆文	404
(3) 祈願文	408
2 表 現	412
(1) 比喩表現	412
(2) 単語の列挙	416
(3) 対比表現	420
(4) その他	429
(5) 文章のリズム	431
第2節 日本になかった文物風習その他の翻訳	437

沙漠／乳香／ペスト／ユダヤ人／接吻

第3節 日本の文物および日本語の表現を援用した訳出	442
1 慣用表現	444
2 係結びの残照	451
(1) 「か—連体形」の場合	452
(2) 「こそ」已然形の場合	454
第7章 『コンテムツスムンヂ』の翻訳者	458
はじめに	458
1 キリシタン時代の翻訳の背景とその方法	458
2 『コンテムツスムンヂ』の翻訳者	461
(1) ペドロ・ラモン	464
(2) 養方パウロ	465
(3) ビセンテ洞院	465
(4) 原マルチノ	466
3 原マルチノの語学力—国字本における修訂の吟味	470
4 ビセンテ洞院を国字本訳者とみなす根拠	474
(1) 語詞面から	474
a「涙の食」に関して b「赤面」について c「狂乱」について	
(2) 語法面から	479
5 国字本訳書の成立	488
6 後藤版と原田版	494
(1) 後藤版の印刷器	494
(2) 原田版の印刷について	498
(3) 傾斜文字について	500
(4) 白抜きの箇所	500

終章 キリシタン時代の翻訳法	503
——文化の翻訳と新しい文体の創造——	
はじめに	503
1 キリシタン時代の時代区分とキリシタン版	503
2 キリシタン版について	507
(1) キリシタン版とその刊行の背景	507
(2) 種類	508
(3) その内容	509
(4) 語学教育へのヒント	511
3 キリシタン時代の「翻訳」という語の意味	513
4 翻訳例	515
(1) 『コンテムツスムンヂ』の訳例から	515
5 新しい文体の創造	518
おわりに—隠れキリシタン二類	525
結びにかえて	526
注	527
参考資料 (コピー1～コピー7)	550
あとがき	554

第1章 「コンテムツスムンヂ」の背景

はじめに

「コンテムツスムンヂ」（一名、「イミタチオ・クリスチ」。日本語訳「キリストにならいて」。本稿ではイミタチオと略称することもある。）は、「第二の聖書」「中世最高の信心書」⁽¹⁾あるいは「中世キリスト教文学の最高峰」⁽²⁾とも言われ、聖書の次に世界諸国語に訳されて、現在にいたるまで愛読され続けている書である。それは、「五十種以上の言語に移され、版の数は六千を越える」⁽³⁾といひ、また、今道友信氏は「ラテン語手写本が三百種を越し、ラテン語印刷本は二千種以上、すでに15世紀前半に部分訳ではあるがドイツ語訳(1434年)、フランス語訳(1447年)が出、19世紀末までにほとんどすべての近代語訳が成立」⁽⁴⁾したと述べておられる。ラテン語の批判テキストを作ったティブルツィオ・ルーボ師によれば、ラテン語原文だけでも六百種以上の手稿本がある⁽⁵⁾という。キリシタン時代にも、これを翻訳してキリシタン版として刊行し、日本人キリシタン、とくに貴族や武士層に大きな影響を与えた。高山右近や細川ガラシアも愛読したという。なかでも細川ガラシアは本書を身の出処進退を決める際の心の支えとしたと伝えられる⁽⁶⁾。ちなみに、キリシタン時代以後、19世紀末から現代までに日本語訳されたものだけでも20訳を下らない⁽⁷⁾。

キリシタン版のコンテムツスムンヂは、ローマ字本と国字本の2種3冊の現存が知られている。そのうち、1596年、(刊記はないが天草のコレジヨ刊の)ローマ字本はオクスフォード大学ボドレイアン図書館と、イタリア・ミラノのアンプロジアーナ図書館に各1部ずつ所蔵され、1610年に京都で刊行された国字本は、天理図書館に蔵せられる天下の孤本で、重要文化財である。

ローマ字本、国字本ともに、全4巻1冊仕立てで、ローマ字本は修道者